

生活文化の継承にいかに向き合うか

小野寺節子

1 出会い

昭和 50 年前後、東京都練馬区の石神井公園近くに建ち並ぶ瀟洒な住宅地の一角に、中村俊亀智（たかを）・孚美先生ご夫妻の家があり、坪郷英彦さんと出会った。大学院生時代の坪郷さんは、中村先生を師と仰ぎ、東京の大学院に移られた頃だったと思う。私は、「秩父祭りと屋台囃子」に夢中だったが、新しい分野と視点で都市祭礼を捉える孚美先生の方法論に強い関心を抱いていた。

この中村邸で、私たちは、孚美先生の手料理を楽しみ、お二人の研究者としての眼差しに、和やかでひたむきな人々の存在を知った。私たちが帰るときには、お二人が門の外で、坂上の角を曲がるまで見送って下さった。また、坪郷さんの面ざしが、何となく私の弟に似ているところも、この方々に親しみを感じるどころだったと思う。

坪郷さんは大学院修士課程を終えられ、建築、有形資料、文化財としての保存活用などについて、様々な調査や報告書作成に当たられる頃、私も民俗芸能、民俗音楽、祭礼調査などの仕事に追われていた。坪郷さんが図面作成をされるように、私は音楽の譜例作成によって資料の客観化を進めていた。坪郷さんが「坪郷先生」になられたのもこの時期である。

2 『豊島区长崎獅子舞調査報告』について

昭和 63 年から平成 3 年にかけて、中村先生を中心とした行政調査に関わる。東京都豊島区の委託により「長崎獅子舞調査会」が発足し、区内唯一の民俗芸能の「三匹獅子舞」に関する総合調査を計画した。この頃、経済的にはゆとりのある時期で、潤沢な調査費と人員を確保することができたが、中村先生が自由な発想と方法を見守って下さっていたことが、当時の私たちにとってまことに恵まれていたことである。むろん、孚美先生も参加されていた。

この調査の中で、坪郷先生は、「Ⅱ有形資料の調査 4 空間構成・用具」を担当されたが、「動作分析」にビデオ画像とコンピューター利用による《重心移動》の抽出を行い、獅子舞（「花舞」の太夫獅子の動作）を分析された。非常に興味深いと思った。この時、すでに伴奏となる笛旋律の譜例作成ができていたことも、分析に役立ったと述べられている（長崎獅子舞調査会（編）1991a：27-30）。

これに対して、私の作業は、伴奏楽曲の譜例作成、繰り返し回数、ベテランと若手の演奏比較、一演目の芸態・伴奏・地元伝承者の解説文言などを作成し、無形のもの視覚資料化を進めた（長崎獅子舞調査会（編）1991b）。また、芸態のビデオ撮影では、3 点方向

(正面・真横・真上)からの撮影とタイムキープを統一して入れておくことを実行した。現在では、考えられないアナログ的方法であっても、当時の芸能撮影や芸能記録方法が、撮影者の主観や映像として修正処理された作品製作であったことを考えると、研究資料に寄与できるものだったかと思う。

やがて坪郷先生は、山口大学へ行かれた。ご専門を活かしつつ、地域や学生と調査や研究を進められている。私は少し特異な譜例作成などを求められ、民俗芸能・民謡わらべ歌・祭礼芸能の分野から、伝統(古典)芸能・沖縄芸能、江戸文化論などに広がり、国内中心であるが、多くの地域に多くの研究仲間、行政担当者などのネットワークが広がっていた。それでも、中村ご夫妻、地域調査のリーダーといわれる方々を通じて、坪郷先生とは古くからの友知人として繋がっていた。

時期が前後するかも知れないが、ある時、秋田県角館からからハガキをいただき、「こちらで、小野寺の名を聞きました」とあって、思わず微笑んでしまった。「角館祭りのやま行事」が国重要無形民俗文化財の指定を受ける前後に、3~4年、9月の祭りに通っていたことがあり、当時の町長や地元の方々に大変お世話になったことがあった。中村孚美先生がかつて書かれた論文があり、関心を持っていたが、坪郷先生も関わりを持たれ、角館に深く関わっておられた時期である。

3 『秩父滝沢ダム水没地域 総合調査報告書 下巻』について

昭和50年代から平成10年代、埼玉県では県レベルの民俗を含む総合調査やこれに匹敵する規模の調査が行われた。秩父市在住の小林茂先生も、埋蔵文化財・民具・地域文化に多大な造詣と、若い研究者を大切に育む立場におられた。先生の家は、常に若い人たちのサロンのようだった。

そうした中で、平成6年、『秩父滝沢ダム水没地域 総合調査報告書 下巻』が刊行された(滝沢ダム水没地域総合調査会(編)1994)。秩父市の奥、大滝村にダムが建設されるための総合調査であった。

坪郷先生は「第2章 民家と生活」を担当された(共著 澤田雅彦・高尾純宏)。「1. すまい概説、2. 民家、3. 穀箱」(pp254~291)を担当し、民家では、7軒の図面、生産歴・生業、作業場のメモをあげられている。民家の図面も構造図、生活図があり、具体的な暮らしの様子が解る。穀箱はこの地域では、重要な穀物庫であり、屋敷取り、宅地・畑・山林の位地、屋号などの記述により、地域の生活浮上してくるのである。

「第9章 民俗芸能」は、「1. 三峰神社神代神楽、2. 浜平の獅子舞、3. 門付け、4. 童戯・娯楽、5. 民謡」であったが、民俗芸能では概要、由来、演目の組み方と演目の構成、演じ方と伝習をあげ、民謡では、既存資料・伝承者・種類・民謡の特色、3事例について山の暮らしと歌とをあげた。

4 生活文化の有形と無形の相違と研究視点の共通性

両章とも、有形・無形の資料自体を明らかにした後に、地域的特色と資料との対照し、その背景を丁寧に聞き取りした。この点は、まさに有形・無形のものであっても「暮らしや人々の息遣いを第一とする」視点であり、人々の暮らしを見せていただき、そこに底通する民俗文化に視覚的客観性を添えて資料化し、その特色を伝承者に還元すると同時に、民俗文化の継承の核にしたいと思う共通のスタンスがあると確信している。

坪郷先生が大学での業績を積み重ねている頃、私は非常勤講師などを勤めつつ、文化財行政関係の委員などを仰せつかる機会が増え、東京都文化財審議会委員を八期勤めた後、坪郷先生を推挙し、委員をお引き受けいただいた。生活文化財（有形民俗・無形民俗・風俗風習・民俗技術など）の保護と継承に対する意見を求められ、自分の専門的立場から回答や提案を発する役目である。

5 「ありがとう」にこめて

中村先生が明海大学を退職されたのは、平成 14 年頃で、先生の研究室の片付けに 2 人で伺った。孚美先生は体調を崩され、自宅療養されていたが、久しぶりに 4 人で楽しく過ごした。

平成 23 年 4 月、孚美先生が他界された。朝、坪郷先生から電話があり、急いで石神井に駆けつけ、めまぐるしい状況だったが、近親者で葬儀を営んだ。むろん、2 人で同行した。中村先生が孚美先生の代表的な論文を本にされたいということで、坪郷先生がその労を取られた（中村孚美遺稿論文集出版委員会 2013）。また、平成 24 年 10 月、中村先生が他界された。ご遺族の意向もあり、11 月から翌年 6 月にかけて、坪郷先生の上京に合わせて、中村邸の蔵書や資料の分類処分に当たった。建物も解体することによって、改めてご夫妻の研究者としての暮らしや生き方まで、ま近かに拝見した。膨大な蔵書や資料は、角館に保管の場を得て、平成 25 年 6 月 2 日、トラックが出発した。かつて、ご夫妻が私たちを見えなくなるまで見送って下さったことが、ふつふつと込み上がってきた。

なお、「資料紹介」として、坪郷先生は「中村俊亀智・孚美人類学関連資料」（坪郷 2014）をまとめられている。

[参考文献]

- 滝沢ダム水没地域総合調査会（編）1994『秩父滝沢ダム水没地域 総合調査報告書』下巻
坪郷英彦 2014「資料紹介 中村俊亀智・孚美人類学関連資料」『やまぐち学の構築』10 pp.1-24
中村孚美遺稿論文集出版委員会 2013『都市の祭り 中村孚美遺稿論文集』
長崎獅子舞調査会（編）1991a『豊島区长崎獅子舞調査報告』1
——— 1991b『豊島区长崎獅子舞調査報告』2



写 1①



写 1②

写真 1 お子様誕生祝いの茶碗（製作年次不明、底に 88.3 あり）



写 2①



写 2②

写真 2 中村邸の書斎（H24.11.4）

所属：國學院大學文学部

E-mail アドレス：ds-onode@wmail.plala.or.jp